

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

松野志氣雄<sup>まつのしげお</sup> (1902-1951) は、1925年、早稲田大学商学部在学中に東京朝日新聞社へ入ります。翌年大学を卒業して1927年に計画部員となり、成澤玲川部長の下で下岡蓮杖記念碑の建設(1928年)に奔走し、「第二回国際広告写真展」、「独逸国際移動写真展」(1931年)などの運営に携わりました。1933年にグラフ部へ移って同年7月号から『アサヒカメラ』に携わり、それまでの実技指導を主とした誌面から、漫画や小説など読み物の掲載、増頁や付録の添付、読者向けイベント開催など大衆雑誌的な性格の編集を行い、好評を博して部数を大幅に増やしました。その後、1941年創刊の『科学朝日』編集長を兼任しています。



『アサヒカメラ』1933年7月号

戦後は1945年12月の出版局写真部発足に伴い初代部長に就任しますが、1948年ごろに退社しました。その後1950年に『カメラファン』(イヴニング・スター社)編集部に入りましたが、不慮の事故で世を去りました。

学生時代から熱心なアマチュアカメラマンで、1922年7月創刊の写真雑誌『アマチュア』(金星堂)には、松野が投稿した記事や懸賞写真の結果が多く見られます。特に同年12月号の「ヴェストで十五枚撮り」では、ベスト判カメラの画面サイズを小さくして多くの枚数を撮影する方法などを紹介しています。続号に寄せられた記事には、編集者からの注記として「その経済的である点と、寫眞愛好家の子供らしい好奇心と研究心とを煽つて、實地に就いて、いろいろ試みられた人が非常に多いやうだつた。」と、反響の大きさが記されています。



『アマチュア』1922年合本

自らも写真が好きであった松野の『アサヒカメラ』における企画構成力は、他誌を圧するものでした。「アサヒの松野さん本音を吐く?」(『カメラアート』1939年12月号)では、写真雑誌関係者の集まりで、松野が怪気炎をあげながら写真について詳細に力説する様子を記し、「此の調子でアサヒカメラの名プランが、どしどしと生れて来るんだから助からない。」と評しています。また『アサヒカメラ』には、本名のほか「蒲田平松」の筆名で記事や写真を寄せています。

著書には、アサヒカメラ叢書『広告写真術』(東京朝日新聞社・1934年)があり、広告写真の基礎知識や発達史を紹介し、具体的な「広告写真の立案」、「広告写真の表現法」、「広告写真製作の実際」などを、写真の実用化という観点から平易に記述しています。